

令和5年度第2回愛知県環境教育等推進協議会 中間評価（案）に対する質問・意見等への対応案について

質問・意見				対応	
番号	委員名	ページ	質問・意見等	ページ	対応案
1	伊藤委員	p.5 0.2 ～ p.9 0.18	・定量的評価の部分で、アンケートの数値のデータが記載されているところがあるが、数値に関わる言及の仕方は主観的な表現を避けた方がよい。	p.5 0.2 ～ p.9 0.18	・3（1）定量的評価（p.5～p.9）をご指摘のとおり修正。
2	千頭会長	p.5 0.2 ～ p.9 0.18	・中間評価では、頑張っている事例を評価している。定量的評価も先ほど御指摘があったように、プラス面でポジティブに評価をするという部分は大事にする。同時に、これが全てではないので、我々の評価の俎上についていない部分の課題もきちんと出すとよい。	p.5 0.2 ～ p.9 0.18	
3	守安委員	p.5 0.3～0.17	・家庭の定量的評価の部分で、自然観察会や環境学習講座等に参加する直接体験や、家族や友人等と一緒にしたことがある環境配慮行動への参加率が低いという部分についての評価の理由がない。進んでいない理由が分からないのに、これから一層促していくと書かれていても、何が促されて、県民に何が届くのか分かりにくい。 ・具体的になぜそこが課題として挙がっていて、その課題に具体的にどう応えていくのかというのは、今後出てくると思うが、そこは疑問点である。	p.14 0.5～0.6、 0.14 p.17 0.5～0.6	・令和4年度のアンケート結果（県政世論調査）から、負担感が大きい活動への参加が進んでいないことを、4（1）に課題として追記する。 ・課題への対応としては、4（1）に「環境学習等の情報や機会の提供等を行い、自発的な活動を促すこと」、5に「身近な事例を具体的に紹介するなど、気軽に参加できる環境を創出して自発的な行動を促し」と追記する。
4	川手委員	p.5 0.18 ～ p.7 0.36	・今の子供は自然体験が少ないと感じる。自然に触れるといった体験ができる取組を進めていくことは、今必要になってきている。 ・特定の教科に限らず様々な観点で、環境に対することを取り上げられるということを学校等に発信していただきたい。		
5	富田委員	—	・視点を換えれば、英語や社会科などでも様々なことが環境教育につながることを教員等に周知していくことが第一歩となる。	p.14 0.34～0.35	・研修の機会を増やすことで、教師が研修に参加しやすくなることを考えるため、4（2）に「地域や学校の実態に応じた環境教育を行っていくために、必要な情報等を得られるような研修の機会や、多様な主体との交流の場を設ける」と追記する。
6	伊藤委員	p.6 0.3 ～ p.7 0.18	・定量的評価で、小中高校においては、教員は環境教育に関わる研修に参加をする時間やゆとりがないため、本務に対して追加の研修には関わる余裕がないというような記載があった。その辺りは課題で、教師が研修に参加できるような環境づくりが必要だと思ったので、それについての記載を一行程度追加していただきたい。		

質問・意見				対応	
番号	委員名	ページ	質問・意見等	ページ	対応案
7	伊藤委員	p.14 0.18~0.36	・まとめの書きぶりは、より積極的に前向きに評価をしてよいと思った。	p. 14 0.22~0.23	・アンケート結果から、総合的な学習（探究）の時間等を活用した環境教育の実施率が増加していることが分かるため、4（2）に「ほとんどの学校で総合的な学習（探究）の時間等を活用し」と記載する。
8	今井委員	p.16 0.25~0.28	・行政の役割の部分で「コーディネート機能の充実」ということが書かれているので、中間評価では、コーディネート機能の充実というところにもう少し触れられるといい。コーディネート機能が非常に大事になっているので、主体と主体をつなげていくところをどのようにやっていくか。社会教育だと、地域コーディネーターが学校と地域と家庭をつなぐ役割を担っているが、そういう役割をどういう方に担ってもらえるのかしっかりと考えていくといい。	p. 16 0.35~0.37	・各主体・世代間の学び合い・育ち合いにより、多様な視点、能力等が育まれると考えること、また、連携・協働ができていない要因として、どのような主体が、どのような活動をしているかを知るのが難しかったり、相談先が分からなかったりするということが考えられることから、今後の「行動する人づくり」を推進するため、5に「「行動する人づくり」を一層促進するため、必要な情報等を得られるような研修の機会や、多様な主体との交流の場を設けるなど、コーディネート機能を充実させ、各主体の連携・協働を促していきます。」と追記する。
9	新海委員	—	・協働・連携ができていないという結果がほぼ出ているので、その要因が何なのか、どういう状況になればいいのかをもう少し書き込んでもいいのではないかなと思った。この協議会は多様な主体が集まって議論しているので、そこを生かす方法があると思う。		
10	千頭会長	—	・これは中間評価だから、単にいい、悪いということだけではなくて次の5、6年間に、新たに、あるいは更に何に力を入れるべきかという方向性が見えるといい。次の方向性が見えるように、できるだけ今まで作業されたものから読み取っていくということ、大変だと思うが頑張っていけたらいい。		
11	新海委員	—	・定性的評価で取り上げた各主体における取組事例（グッドプラクティス）の中間評価の結果から、まだ行えていないところの底上げをどう図っていくかということを入れてほしい。全ての主体が資料にあるような状況ではないと思うので、取り上げた事例から、エッセンスを今後どう生かしていくかということを入れてほしい。	p. 17 0.3~0.4	・各主体の底上げを図るためには、情報の内容が分かりやすく、取得しやすいものがよいと考えるため、5に「インターネット等を通じて分かりやすく発信するなど、優れた事例を広く活用」と追記する。 ・事務局としても、各主体における取組事例（グッドプラクティス）をインターネットで周知することで、環境学習等の情報発信を実施する。

質問・意見				対応	
番号	委員名	ページ	質問・意見等	ページ	対応案
12	篠田委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・自然の大きな力の中の一部として人間の活動があるということをどこで教えるかが環境教育の原点。 ・もりの学舎ようちえんの活動は、非常にいい。 ・地球規模で環境問題を考える感性を、どこでつけるかということが非常に大切。それは教育の部門でやるといいと思うが、学校には余裕がないと言われるため、その辺を押さえることができると、環境教育が進んでいくと思う。 	p. 17 0.5~0.8	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に関する課題を考えることや、その感性を養うことは、家庭・学校・社会のあらゆる場を活用して身につけることができると考えられるため、環境学習はあらゆる場面で学ぶことができるものだと言信し、課題解決に向けて行動変容を促していくために、5に「様々な機会を環境学習の場として活用できるよう、身近な事例を具体的に紹介するなど、気軽に参加できる環境を創出して自発的な行動を促し、環境問題を自分のこととして主体的に取り組むことのできる「行動する人づくり」を進めていきます。」と追記する。
13	松尾委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・自然体験をよくしていると感じる子供は、その保護者も自然体験の経験があると感じている。 ・私たちは、特に幼稚園で、環境に関する取組の研修を実施しているので、常日頃から子供たちが自然に関わる素晴らしさをよく感じる。 ・子供から出た言葉をピックアップするなど、子供から発せられるものを大切にしながら取組を進めるとよい。 ・遊びの中で自然に触れるという感覚であれば、自然体験に取り組んでいない幼稚園が、調査の選択肢として挙がってくると思う。 		
14	大鹿会長代理	—	<ul style="list-style-type: none"> ・県の各部局の事業について、自覚がないままにやるのではなくて、環境学習として実施していることを理解・認識した上で事業を進めているということならよい。 		
15	吉川委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・環境学習プラザの取組、夏休み！おうちでエコアップ大作戦、もりの学舎の取組、私の学校の近くだと弥富野鳥園などがあり、豊富な取組に驚いている。 ・今年度から県内で始まったラーケーションは、意外にも自然体験を求めてラーケーションが取得されていることが結構ある。 ・自然体験学習など様々な取組が県内各所で実施されていることで、子供への環境に関する学びが支えられている。 		
16	藤岡委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・調査結果で、「学校の課題のところでは「人材教育」などが大事」、定量的評価のまとめで「環境教育や ESD の推進のための人材育成と研究」のパーセンテージがあまり高くない。 ・定量的評価の中で探究する力が不足している状況に見える。 ・行動する人づくりということを考えた時、この部分の強化が必要だと思う。 		
17	中野委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな感じ方、価値観、考え方があっていいと思うので、そういったところも環境学習の中でも取り入れるとよい。 		

質問・意見				対応	
番号	委員名	ページ	質問・意見等	ページ	対応案
18	近藤委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか取組が知られていないことについて、一番住民の身近にある市町村の役割というところもある。 ・事業が単発だったり、市町村単独で行って、続いていかないこともあるので、新しい取組を勉強し、事業所、企業などとも連携していきたい。 ・いろいろな方の協力を得ながら連携をし、継続的な実施ができればいいと思っている。 		
19	新海委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・至るところに連携・協働により一層促進していくと書いてあるが、連携・協働は手段なので、どういう学習の場を作りたいか、それに向けどう連携・協働をしていくという書きぶりが必要になると思う。 		
20	川村委員	—	<ul style="list-style-type: none"> ・我々の行っていることが十分伝わっていないところがあり、どうやって届けるのかというのは大きな課題だと思う。 		